

人は何歳まで 作家デビューできるか

—— 実年齢は問わない時代 ——



数年前、団塊の世代が一齐に定年退職を迎えました。この世代はベビーブーマーですから、`生存共存`に打ち勝ってきた人たちです。非常にハングリーで、高学歴、年齢を感じさせない若さも 있습니다。そこで公募文学賞の世界でもこうした高齢者に注目が集まり、一昨年は60歳以上を応募資格とした文学賞が創設され、さらに昨年は75歳の芥川賞作家まで誕生しました。

しかし、高齢の受賞者はその後の実働期間は短く、従来、大手出版社の新人文学賞では歓迎されませんでした。それがなぜ門戸が開かれるようになったのか。それには理由があるのです。

元小説新潮編集長・校條剛さんに聞く 出でよ、90歳の新人作家

昨年、高齢者の新人が躍進

——昔と今の新人文学賞では何か変化がありますか。

今は遥かにレベルが高いです。理由はやはりパソコンの普及でしょう。今は文章の直しが簡単にできる。昔は手書き原稿ですから、たくさんの直しは難しかったです。最低レベルの原稿というのが少なくなりました。一次で落ちた人と二次に残った人の差がさほどないんです。

——今、60代、70代といった高齢者が書きたがっているのはなぜでしょう？

若い頃には書けなかったからだと思います。小説好きの人の中には、頭脳が明晰で、一流企業に入った人も多い。若くしてプロ作家になるのはぶらぶらしていた人ですよね。就職できなかつたり、失業したりして。僕に言わせれば、才能は誰も変わらない。すべての人ではないですけど、プロ作家になれる人はいっぱいいるんですよ。

——高齢者の中には希有な経験と膨大な

知識を持った方々が多いです。

特に第一線でサラリーマンをやってきたという人は優秀ですよ。小説も書けちゃうんです。森村誠一さんは、サラリーマン時代にうだつのあがらなかった人こそ小説を書けと言っていますが、成功した人は、もつと書けると思います。

——校條さんは、昨年、73歳の新人をデビューさせていますね。

昨年、多紀ヒカルさんの『神様のラーメン』を新聞社に売り込み、朝日、毎日、読売、日経、産経などにインタビューしてもらいました。

その後、75歳の黒田夏子さんが芥川賞を受賞して騒がれました。僕のほうが先にこういうムーブメントをやったのに、後だしジャンケンのように思われると嫌なんですけどね（笑）。

——早稲田文学新人賞の黒田夏子さんと群像新人文学賞（優秀作）の藤崎和男さんなど、昨年は70代で受賞する人が目立ちました。

70歳でも80歳でも、書ける人は書ける。ただ、出版界の、少なくとも新人賞の

枠内では高齢者を敬遠しているのは事実で、今後もしんなりに歓迎するとは思えません。

——校條さんが新人賞を担当されていた30年前、2次選考に高齢者の作品が上がってきたらどうされていましたか。

同一線上に若い人の対抗馬があったら、高齢者のほうを落としましたでしょうね。

——今はどうでしょうか。

以前、ヤフー・ジャパン文学賞の下選考をしました。最終選考は候補作の数編がヤフーのサイトに公開され、読者が投票できる仕掛けになっていました。

そして、ここが大事な点なのですが、応募者はペンネームでも本名でも自分の好きな名前とメールのアドレスだけを応募原稿に書き込めばいいことになっていました。住所も年齢も、男女別も、もちろん、本名も主催者に知らせる必要がありません。

多くの新人賞の応募規定では年齢などを明記するようになっていますが、身元を確認することによって、逆に要らぬ計算が入ってしまうことも考えられます。

新人を育てる人も場所もなく

——かつての新人賞は短編も多かったのですが、それが10年ほど前から長編ばかりになりました。理由は即戦力を求めているからだと思いますが、新人を育てる



校條氏がプロデュースした『神様のラーメン』
(多紀ヒカル著・左右社)



校條氏の新社刊『ザ・流行作家』
(校條剛著・講談社)

余裕がなくなったのでしょうか。

確かに、暇はないですね。それと、やはり長編のほうの実力を判断できます。

——面倒見はどうでしょう。

面倒見はどの会社も悪いでしょう。たとえば、ある出版社は3年ごとに編集者が異動になります。その際、前任から後任へ「○○さんをお願いします」と作家が引き継がれるわけですが、後任は最初から手がけてないから愛情がない。別の新人が出てくると、そっこのほうに気持ちがいっちゃう。編集者が悪いのではなく、制度がそうなっているんですよ。

——問題は異動ですか。

もう一つ、書く場所が少ないということがあります。編集者にとって一番大事なことは場所を与えることなんです。そ

うすれば作家は育っていくんです。与えないから腐っていく。今はその場所が現役作家で埋まっちゃっているんです。

——それはなぜ？

話題の作家や有名作家が名を連ねていないと雑誌も本も売れないから。雑誌で新人作家特集をすると、必ず惨敗します。

——新人に割ける誌面も少ないですね。

100〜150枚あると作家本来の味が出せるのに、雑誌に掲載しやすいから30〜50枚で書いてくださいって言う。でも、それではいいものはできない。それから短編集が売れなくなってきた。要するに長編の時代が変わっちゃったんです。エンタメの場合は文庫が主流です。文庫

で売れない作品は生産する意味がないんです。

——そんな中で、75歳の黒田夏子さんが受賞者になりました。

従来の小説は書き方が決まっています、つまり閉塞感があって、それに選考委員

たちは飽き飽きしちゃっていたのかも。

——高齢者だから選ばれたのではなく、若い人になんか感覚だから受賞したということでしょうか。

選考委員は、天井に風穴を開けてくれる作品を待っていたんでしよう。格好よく言うと、ボードレールを愛読していた小林秀雄が初めてランボーを読んで、球体のガラスにバリンと穴を開けられた、

そんな気持ちじゃないですかね。

作家は10年と考えれば

——校條さんはカルチャーセンターでも講師をされていますね。やはり、書きたい人が多いですか。

「書きたい人は多いけど、読みたい人が少ない」とよく言われているんですよ。

カルチャーセンターでは2005年から教えていますが、皆さんにはっぱをかけるんです、これ読んでおいたほうがいいとかね。

——新刊を買うこと、図書館で借りないで、買って読むこと。他人様に自分のものを読ませたいなら、他人様の小説を逆に読んであげるべきです。それと、新刊はトレンドって言うのか、「今」っていう雰囲気があるんです。それを身につけておかないと、時代おくれの雰囲気がちやいますからね。

——書きたい人がたくさんいる、そして、そうした人の中から毎年何十人も作家がデビューすると、出版社としてはプロ作家一人ががんばってもらうのではなく、一発屋でもいいからそういう人がたくさん出てほしいということになり、だったら別に年齢は60歳でも70歳でもいいじゃないかというふうになっていったんでしょうか。

出版社が、そう思ってくれたらいいで

すね。

僕は「作家10年説」というのを唱えていて、今の作家は現実には10年しかないものを書いていないですよ。10年経ってリーダーティーがなくなった作家は出版社にうとまれていくし、本が出せなくなっていく。

——長く活躍する作家は何か違う？

成功している好例は、ハードボイルドから歴史小説、そして中国ものというふうに10年単位で移行した北方謙三氏。

昔は作家になつたらずっと作家でいられたんです。しかし、今は、努力しない人は完璧に食えなくなる時代です。作家は大変な商売で、自分を改革していかなければならない。5年、10年というサイクルだね。

——息の長い作家はほんの一握りで、たいていは10年で一線を退くと腹をくれば、定年になってからでも遅くないとも言えますね。

そう、だから70歳でも80歳でもいいんですよ。80歳でデビューした人は90歳でやめればいいんです。そこでちょうど死んじゃうかもしれない（笑）。

90歳の作家が出るとおもしろいと思いますね。詩人の柴田トヨさんは99歳でデビューして、101歳で亡くなったんですよ。もうちょっと長生きしてほしいかな。「90歳の作家、出でよ！」という感じですね。

主要文学賞23件を調査

作家のデビュー年齢は上がっている

30歳で遅咲きと言われた時代

平成24年下半期の芥川賞は、黒田夏子が『a bさんご』で受賞。史上最高齢の75歳ということもあって話題となりました。一方、直木賞のほうはというと、こちらは男性作家では史上最年少、朝井リヨウが24歳で受賞。平成生まれでは初の直木賞作家となりました。

朝井リヨウは、早稲田大学に在学中の2009年、『桐島、部活やめるってよ』で小説すばる新人賞を受賞してデビューしましたが、在学中にデビューした作家というと、16歳で『花ざかりの森』を書いた三島由紀夫、22歳で『死者の奢り』を書いた大江健三郎、一橋大学在学中に『太陽の季節』で文学界新人賞と芥川賞をW受賞した石原慎太郎、武蔵野美術大学在学中に『限りなく透明に近いブルー』で群像新人文学賞と芥川賞をW受賞した村上龍、高校在学中の17歳のときに『インスタール』で文藝賞を受賞し、大学在学中の19歳のときに『蹴りたい背中』で

芥川賞を受賞した綿矢りさといった面々が浮かびます。

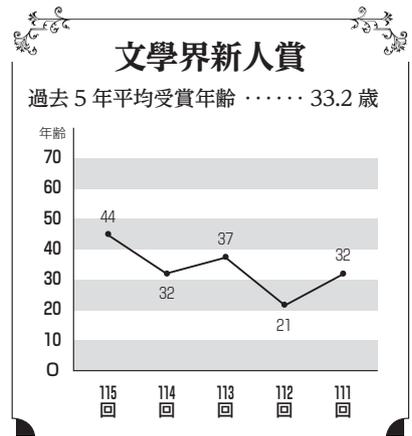
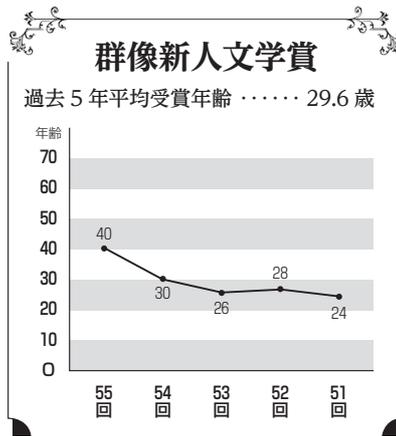
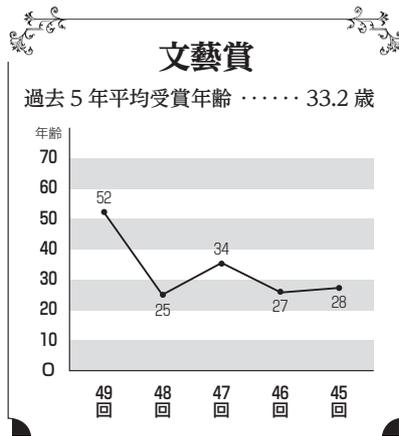
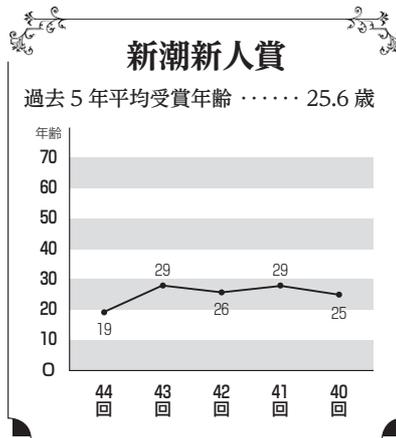
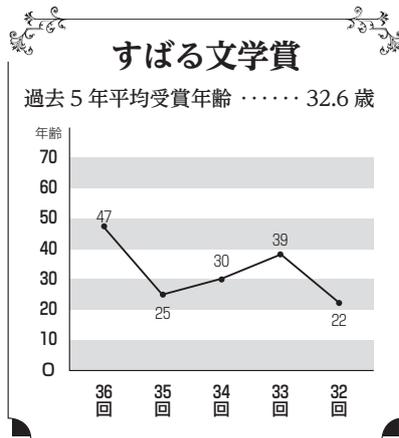
こうした方々と比べればという意味だと思いますが、村上春樹が『風の歌を聴け』で群像新人文学賞を受賞したのは30歳のときで、当時は遅咲きと言われていました。

もともと近代文学の書き手は年齢的に若く、作品の発表年から年齢を割り出すと、森鷗外『舞姫』28歳、志賀直哉『或る朝』25歳、谷崎潤一郎『刺青』24歳、武者小路実篤『お目出たき人』26歳と皆20代の仕事です。

ここに挙げた方々は文学史的には純文学に分類されるような作家ですから、多少少ななかれ自分探しの小説が多く、その書き手となると10代、20代、せいぜい30代ということになりますし、明治期は日本そのものが大人の自我に目覚めた高校生のような時代ですから、アイデンティティーを模索したような小説や、文学のあり方を問うような作品が好まれ、そうなるが高齢者の出る幕はなかったのかもしれない。

主要文学賞 受賞年齢の推移

※同じ年度に複数の受賞者がいる場合はいずれか一方を無作為に選出。受賞作が共著の場合もいずれか一人の年齢を無作為に選択。
 ※該当作なしの場合や受賞者の年齢が不明の場合はその回は飛ばしています。生年月日から算出した受賞年齢は最大で1歳の誤差がある場合もあります。



高齢者にも門戸が広がる

オール読物新人賞は今回から「オール読物」の購入が義務づけられましたが、それ以外の文学賞は経費が出る一方で、賞の実施そのものでは儲かりません。新人がデビューし、人気作家になるかベストセラーを出したりしてはじめて出版社は潤うわけです。

そうなることと選考基準のどこかには必ず将来性が入ってきます。受賞作も売れてほしいけれど、その後ももっと活躍してほしいと思うのは、利潤ということを抜きにしても当然のことでしょう。

年齢も無視できません。最終選考にどの作品を残すか迷ったとき、編集部としては、同程度のレベルなら70歳の方より伸びしろがありそうな20代の方に……と、思っても不思議ではありません。

実際、昭和の時代の大手出版社による新人文学賞ではそうだったでしょう。

ところが、ちよつとずつ事情が変わってきました。それ以前に、新人発掘を目的とする新人文学賞ではなく、非出版社系の単発の文学賞では将来性など二の次ですし、エンターテインメント小説、とりわけ時代小説は、知識の面でも人生経験の面でも、10代、20代では歯が立たないというところがあります。

そのうえで言うと、昭和の終わりぐら

いから、「高齢化社会」「生涯学習」の時代になり、高齢者がこぞってカルチャーセンターに通う時代を迎えました。

この時点では、書きたい人はあっても、肝心の主催者（出版社）側のほうに「高齢者を受賞させても仕方ない」という雰囲気があり、完全な一方通行だったと言っているでしょう。

しかし、この10年で事情はかなり変わってきました。このあたりの事情は前項の校條剛氏のインタビュと重複しますので詳述はしませんが、要するに、「育てるのではなく、即戦力が出てくるのを期待する」

「作家として生涯活躍する人はほんの握りではない」

という状況から、「一人の流行作家を作るのではなく、一発屋でもいいから、より多くの作家を発掘する」という方向にシフトしていったのではないのでしょうか。

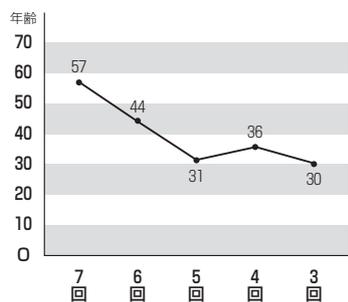
そうなると、死ぬまで作家でいる道は厳しくはなりません。しかし、逆に多くの人にチャンスが生まれ、結果、高齢者にも門戸が開かれるようになったのです。

高齢作家の嚆矢三人

最近では50代、60代で受賞してデビューというのも珍しくなくなり、昨年はつい

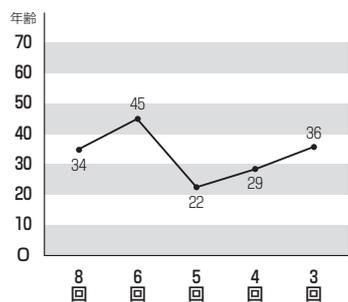
小説現代長編新人賞

過去5年平均受賞年齢……39.6歳



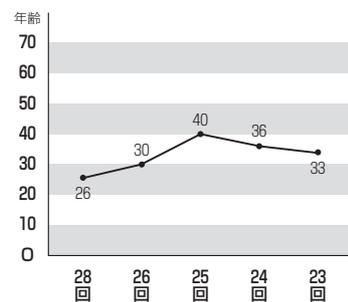
新潮エンターテインメント新人賞

過去5年平均受賞年齢……33.2歳



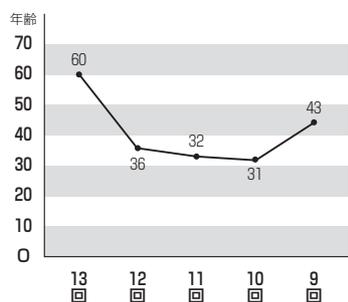
太宰治賞

過去5年平均受賞年齢……33.0歳



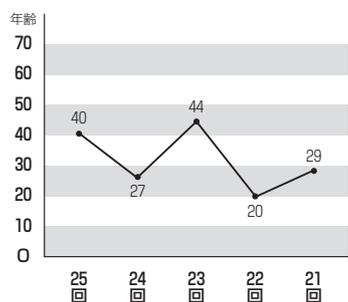
小学館文庫小説賞

過去5年平均受賞年齢……40.4歳



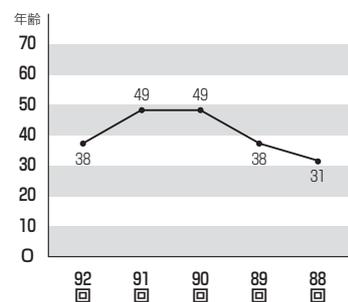
小説すばる新人賞

過去5年平均受賞年齢……32.0歳



オール読物新人賞

過去5年平均受賞年齢……41.0歳



に70代が出ましたが、こうしたことは公募文学賞が最初ではありません。文学賞で高齢者を受賞者に選ぶのにはそれ相当のハードルがあり、それが実現するまでには長い前段があります。

その嚆矢として三人挙げるなら、赤瀬川隼、隆慶一郎、加藤廣でしょう。

赤瀬川隼は、昭和6年生まれ。住友銀行、外国語教育機関書店などに勤務後、53歳のときに『球は転々宇宙間』でデビュー、63歳のときに『白球残映』で直木賞を受賞しました。

ちなみに、芥川賞作家の尾辻克彦（赤瀬川原平）は弟です。

隆慶一郎は、大正12年生まれ。脚本家を経て、61歳のときに『吉原御免状』でデビュー。小説を書くようになったのは還暦を過ぎてからで、その後、急逝したこともあって実働は5年。代表作は『影武者徳川家康』です。

加藤廣は、昭和5年生まれ。山一證券経済研究所顧問を経て、ビジネス書を著すようになり、2005年に75歳でデビュー。代表作『信長の棺』は小泉純一郎総理（当時）が愛読書として挙げたことからベストセラーとなりました。

この三人は新人文学賞を経て文壇に登場したわけではありません。デビューの詳しい経緯は分かりませんが、赤瀬川隼は弟が作家、隆慶一郎は名のある脚本家、加藤廣はビジネス書の著者でしたから、

もともと出版界と繋がりがあり、その関係で声がかかったのでしょうか。

いずれにしても、こうした方々の活躍を経て、文壇内に、高齢者も書き手として十分通用するという印象が浸透してきました。

これが公募文学賞においても高齢の受賞者を出す土壌となったわけです。

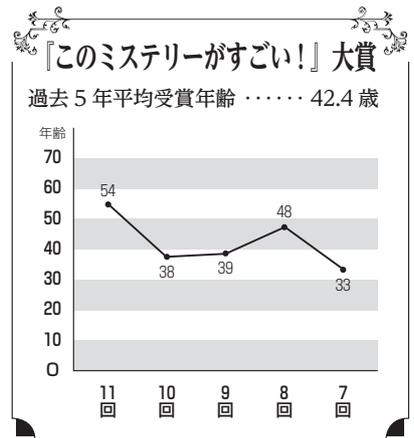
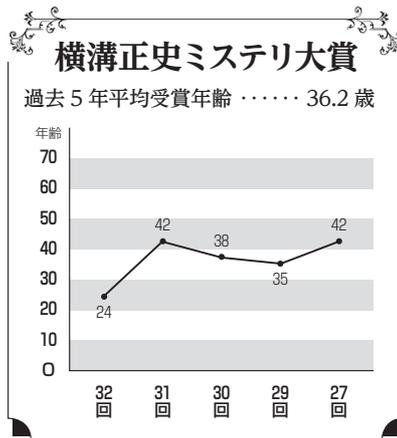
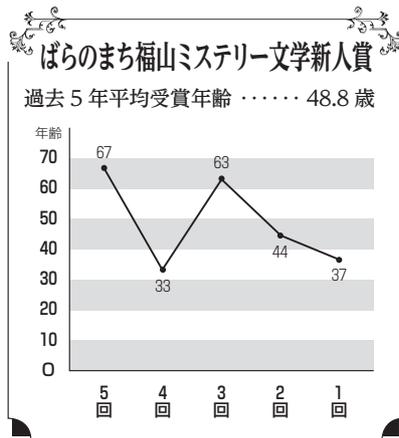
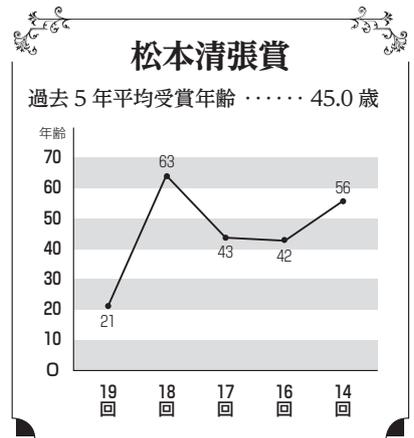
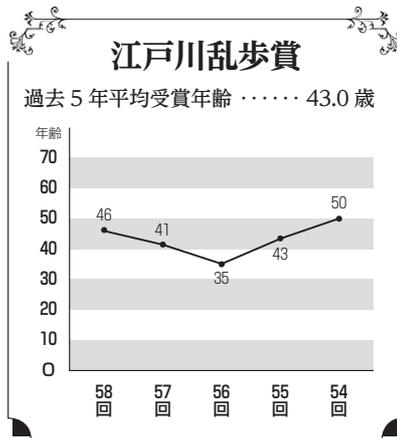
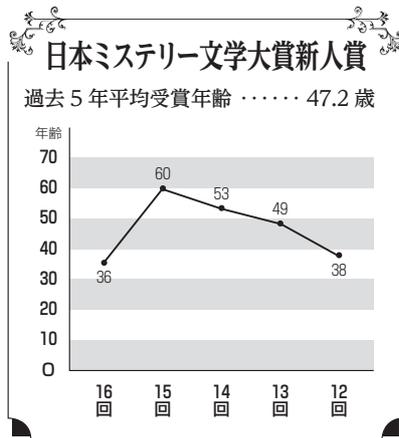
実年齢は問わない

今回、主要文学賞の過去5年の受賞者の受賞年齢を調査しましたが、昨年はある意味、あたり年で、2012年にこの5年で最高齢の受賞者を出している賞がかなりありました。

内訳を見ると、文壇界新人賞（44歳）、群像新人文学賞（40歳）、すばる文学賞（47歳）、文藝賞（52歳）、小説現代長編新人賞（57歳）、小学館文庫小説賞（60歳）、『このミステリーがすごい！』大賞（54歳）、『このミステリーがすごい！』大賞（54歳）、ばらのまち福山ミステリー文学新人賞（67歳）、日本ホラー小説大賞（56歳）、坊っちゃん文学賞（61歳）、ちよだ文学賞（60歳）と、実に23件中11件もありました。

2012年の受賞者の年齢は、純文学系ではそれでも40代ですが、それ以外の賞では団塊の世代がこぞって応募してきたような印象すらあります。

平均年齢は、純文学系6賞（文壇界新



人賞、新潮新人賞、群像新人文学賞、すばる文学賞、文藝賞、太宰治賞)では20代後半から30代前半で、中間小説系、エッセイ系、ノンフィクション系となるにつれて年齢が上がっていつています。

下記の表の最高齢は、ばらのまち福山ミステリー文学新人賞の第5回受賞者で67歳。同賞は過去5年の平均受賞年齢でも48・8歳と2位で、高齢者の躍進が目立ちます。

この稿の冒頭で、30歳でも遅咲きと言われた時代があったと書きましたが、当時はそう言われてしまうと、20代後半で芽が出ない人は焦り、40代の人は諦めムード、そして50代以降の人は絶望的な気持ちにならざるを得ませんでした。

しかし、70代でもデビューできると考えれば、学生さんは焦らずじっくり5年は社会人経験を積もうという気になれますし、働き盛りの方は定年後を作家人生のスタートにしてもいいわけです。夢が広がります。

高齢者であればいいか

綿矢りさが19歳で、金原ひとみが20歳で同時に芥川賞を受賞した2004年の新人文学賞には、あの子が書けるなら私だって、というような10代、20代からの応募が殺到したそうです。

2013年は逆に、75歳でデビューす

るおばあちゃんがいるのなら私だって、と一念発起する高齢者が殺到するかもしれません。

それはさておき、受賞する高齢者というでない高齢者は、どこが違うでしょうか。かつては、高齢で受賞する人はなんだかんだいって何かしら文章をずつと書いてきた人か、書かなくても、類まれな読書家といった人でした。

最近はどうでもありません。文学とは縁のない人も多い。ただし、頭脳明晰、好奇心旺盛という点は外せません。逆を返せば、そういう人にはチャンスがあると言ってもいいです。年齢を感じさせない、しかし、それでいて高齢だからこそ醸せるある種の「新しさ」も兼ね備えた作品をものせるかもしれません。

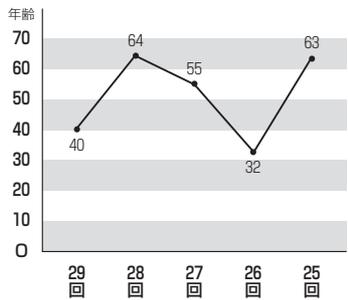
一つ注意点を挙げると、高齢者が等身大の自分を描いた作品を書くのはあまり得策ではないでしょう。それだけではなかなか共感を得にくいのです。

もう一つ言うと、高齢者の方は知識が豊富なだけに、物語を逸脱して知識の披歴に終始してしまいがちのようです。結果、読者に、ご高説はごもつとも、でも、物語としてはちつともおもしろくないよと言われてしまうわけです。

蛇足ながら、ついでにもう一つ言うと、横書きで書いたり、やたらひらがなを多めにしたりといったことをしても意味がありません。理由はお分かりですね。

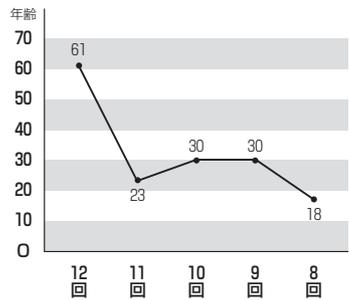
さきがけ文学賞

過去5年平均受賞年齢 …… 50.8歳



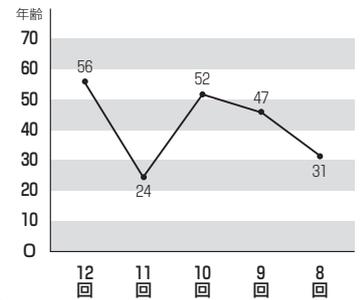
坊っちゃん文学賞

過去5年平均受賞年齢 …… 32.4歳



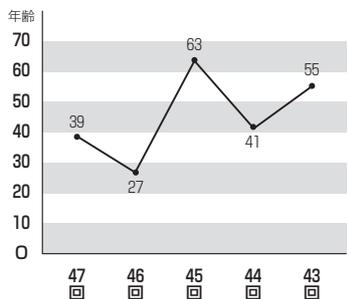
日本ホラー小説大賞(長編)

過去5年平均受賞年齢 …… 42.0歳



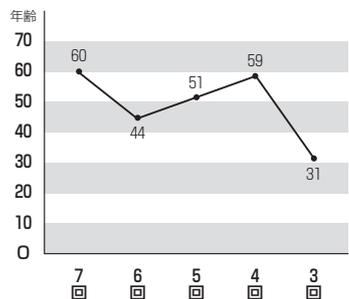
北日本文学賞

過去5年平均受賞年齢 …… 45.0歳



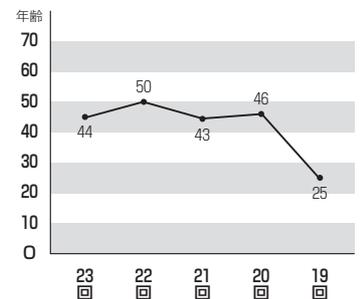
ちよだ文学賞

過去5年平均受賞年齢 …… 49.0歳



日本ファンタジーノベル大賞

過去5年平均受賞年齢 …… 41.6歳



受賞者の年齢について 主催者に聞いてみました

最近シニア世代の新人文学賞受賞者が増えていますが、年齢が選考に与える影響はあるのだろうか。様々な小説ジャンルの新人文学賞を対象に、主催者に受賞者の年齢について聞いてみた。

実年齢より作品の質を重視

受賞者の年齢について、いくつかの文学賞の主催者に聞いてみました。

「日本エンタメ小説大賞」（主催・日本エンタメ小説大賞実行委員会）には18歳〜80歳までの応募があったそう。この賞には受賞作品の映像化と受賞者のプロモートという2つの特色がありますが、映像化に至るためには「売れる本」でなく「売れれば本」であれば年齢は関係ないとのこと。

「ゴールデン・エレファント賞」（主催・「ゴールデン・エレファント賞」運営委員会）では、過去3回、60歳以上の受賞者は出ていませんが、これについて、「本賞は世界に通用する日本の小説を発

掘するのが目的。最終選考員に海外の編集者が入っていることもあり、分かりやすくエンタメ性の強い作品が望まれる傾向がある。シニア世代の応募作によく見受けられる自叙伝的な作品や純文学のよ

うな作品が最終選考に残るのは難しい」とコメントしています。

「野性時代フロンティア文学賞」（フジテレビジョン／角川書店主催）の受賞者は20代〜30代など若い世代が多いそうですが、年齢で不利になることはないとのこと。担当者によると、「賞創設時に30代の女性をターゲットに想定した『青春文学賞』というタイトルを冠していたために応募者も若い世代が多くなったという経緯があり、『フロンティア文学賞』に名前が変わって4回目となった現在もこの傾向は続いているのではないか、

しかし、これから伸ばしていけるだろう芽を見つけて、新しい作品を生み出していこうという賞の目的に沿っていれば、『受賞者の年齢や実働期間の短さについては考慮しない』とのこと。

また、シニアについては、「若い人でも1作品を書き上げて力尽きてしまい、2作目に至らないことも。シニアの方はそれまでの豊富な人生経験を糧に多くの作品を書きためておられ、受賞後、短いスパンで次々と作品を生み出していたいただける可能性もあるのでは」とコメントしています。

「江戸川乱歩賞」を主催する日本推理作家協会では、「選考委員にはプロフェイ

ルを付けずに作品を渡しているので、年齢が選考に影響することはない」、また実働期間の短さについては、「そのような理由から年齢が考慮されることはない」としています。

「やまなし文学賞」では今年も62歳、63歳の方が受賞。主催のやまなし文学賞実行委員会では、今後もシニアの受賞はありと見ているそう。もちろん、年齢が選考に影響することはないとのこと。

第12回「坊ちゃん文学賞」は1057編の応募のうち、60歳以上が151名。高齢者の受賞者も出しています。「さきがけ文学賞」の応募者、受賞者の半数以上はシニア世代だそうです。

取材を通じて

受賞者の年齢が気になるかどうかは、受賞後に受賞者とう関わるかにより異なります。たとえば、受賞後も長く稼いでもらいたいと考える出版社なら、積極的には高齢者は採らないでしょう。

しかし、今は作家の実働年数はせいぜい10年ですし、新人を育てる誌面も少ない、それなら一発屋でも即戦力を待ったほうが効率的という考えが主流ですから、年齢は関係なくなりつつあります。

受賞後は受賞者ほとんど関わりがな

受賞者と年齢 まとめ

- 受賞後、受賞者と関わらない主催者は受賞者の年齢は問わない。
- 新人の発掘を目的とする新人文学賞でも実年齢は問わなくなってきている。
- ライトノベルについては高齢者の受賞はかなり難しい。
- 実年齢より、受賞に値する作品であるかどうかのほうが重要。

くなる文学賞、たとえば、単発の懸賞小説、自治体文学、地方文芸については、もともと年齢を考慮する理由がなく、高齢者が受賞する割合も高くなっています。また、大手出版社によるメジャーな文学賞に気後れした高齢者は、自治体文学、地方文芸に流れる傾向があり、そうしたことからこれらの文学賞では高齢者の受賞者が（比較的）多くなっています。ライトノベルに関しては、活躍する作家の多くが30〜40代ということ、また、年に数冊というような量産が求められることから、高齢者には相当なハードルがあると感じていいでしょう。ただし、どの文学賞にしても、実年齢は関係なくなってきました。受賞しないとすれば、実年齢より、作品に出てしまった悪い意味での年齢のほうを問題とすべきかもしれません。

主催者インタビュー

本格ミステリー「ベテラン新人」 発掘プロジェクト

団塊の世代は宝の山

2011年1月に公募され、話題を集めた、講談社主催の「本格ミステリー『ベテラン新人』発掘プロジェクト」。日本のミステリー界をリードする作家・島田荘司氏発案のこのプロジェクトは、60歳以上を応募資格とし、「長い社会経験を通じて培われた才能」を発掘することを目的としてスタート。

このような賞では珍しいことだが、募集の際に東京で説明会を開催。300名近くが参加したという。

この模様（映像）をWEB上で流すなどして告知をしたこともあって、半年の募集期間で集まった作品数は217編に及んだ。

講談社文芸図書第三出版部の近藤憲二郎氏は、「弊社の小説現代長編新人賞では一年間募集して1000通ぐらいの応募数。それを考えると、年齢制限があったにも関わらず、半年でこれだけ集まったのは相当多いのではないか」と話す。

ところで、応募資格を60歳以上にした狙いは何であったのだろうか。近藤氏は次のように説明している。

「弊社のメフィスト賞のように、西尾維新さんなど若手の受賞が多い賞でも、50代で受賞されている方もいらっしゃる。しかし、今回のプロジェクトにおける島田先生のお考えとしては、長い間仕事をしてくいて、小説を書いてこなかった方の中にこそ大変な知性が埋もれているのではないかと、ということがありました。戦後日本を支えてきた人たちは、一生懸命働いてきて、いろいろな知識を得、知識欲も旺盛。この世代は才能の宝庫なのではないかと。他の賞でもデビューはできるのですが、あえてこの年代にス



受賞作
『ショートスカート・ガール』

ポットを当てて、競ってもらおうというのが、今回のプロジェクトの狙いとなりました」

この狙い通り、応募作品は全体的に当初予想した以上のレベルの作品が集まった。これは、「基本的にシニア世代は文章が上手」であるからではないかと近藤氏は分析する。

「小説に限らず文章や手紙を書く世代。読みやすさという点では合格点の方が多かったです」

ただし、一方ではこうも話す。「その先のトリックを含めたミステリーの構築ということになると、応募処女作の場合、甘さが見えるなという作品が目立ちました」

とは言え、いわゆる自叙伝的な作品や身辺雑記を書いたような作品は全体の2、3割と少なく、きちんとミステリーを書くという熱意のある人が多かったとの印象を受けたそうだ。

では、その中でデビューできる作品とはどのようなものなのだろうか。

物語と自叙伝の違いを知れ

「年齢を問わず、小説というのはなんらかの形で自分が投影される場合が多いと思うのです。それ自体は構わないのですが、ことミステリーに関して言うと、自分の思い入れを書きたいというだけでは、

たぶんデビューはできないという気がします。エンターテインメント小説はやはり、物語ですから。物語を作るといって、自分の思い入れを表現するということとは違うのだ、と冷静に考えられる方はデビューに近いのではないかと思います」

それでは、60歳以上でデビューした場合、出版社としてはその後の実働年数などをどのように考えているのだろうか。

「極端に言えば、小説には一発屋もありだと思っています。受賞の作品一作で、一筆入魂なのか、一作入魂なのか、そういうことが起こり得ると思うのです。長く書き続けるには、キャラクターを立ててシリーズ化していくことも多いのですが、まず一作がヒットしなくては仕方がない。そこで、とにかく面白い小説を一篇、書いてみましょうという話になりました。そういう意味で、最初から、末永く作品を書き続けてもらうことはあまり意識しません。それは若手の人であっても同じです。一年に何作も発表される方もいれば、一年に一作書くか書かないかという方も多いです。その人に合った考え方をすべきことですので、シニアだから特別ということはありません」

このプロジェクトは今後も予定されており、次回は一年程度の募集期間を検討している。

受賞者インタビュー①

本格ミステリー「ベテラン新人」発掘プロジェクト
第1回受賞 加藤眞男

次作に向けて奮闘中

——昨年、受賞作「ショートスカート・ガール」を上梓されましたが、現在の心境は？

現実には厳しい、というところでしょう。か。面白い本が書店に並べば勝手に売れていくものだと甘い幻想を抱いていましたが、昨今は本がなかなか売れない時代ということもあり、その中で新人が生き

残っていくのはなかなか難しい。皆さんがバックアップしてくれているのですが、正直言つてすぐにベストセラーに！というわけにはいきません。今考えているのは第一作目の宣伝をし、何とか次回作につなげたいということです。

——現在の執筆状況は？

当初は、次回作については、同じ賞で佳作になった作品の完成度を高めて書くつもりでした。しかし、最初の本が出てみると思ったよりも売れていかない。理



加藤眞男（かとう・まさお）1950年埼玉県生まれ。青山学院大学文学部卒。和装小物を販売する自営業。2012年6月、講談社より受賞作「ショートスカート・ガール」が刊行され、現在次回作の制作に励む日々を送る。

由はいろいろあると思いますが、第一には作品の力が足りなかったのではないかと考えています。私が受賞した2つの作品は島田荘司先生も言っておられるように、同じくらいのレベルの作品。そうだとするならば、同じレベルのものを出して世に問えるだろうかと考えました。そこで、新作ではもっと面白い、パワーのある作品で行こうと去年の8月頃に決め、10月ぐらいには初稿を書き終えたのですが、それから3回書き直しました。次回作で真価を問うべく奮闘しているというのが現状です。

年齢を経た者の強み

——もし、10代、20代の頃に小説を書き始めていたとしたらどうでしたでしょうか。

小説については、この年齢になったから書けたのだと思っています。60代になり、これまでの経験や思い、いろいろなアイデアやテクニクなどがあふれて書けるようになったのですよ。だから私の場合、若いときに小説で受賞することとはありえないです。もし、受賞できたとしても一発屋で終わったことでしょう。今みたいにしぶとくないと思いますし（笑）。若いときに受賞してしまうというのはむしろアンラッキー。人生は長いのですから、後半に向けてだんだんよくなる

ほうがよいですよ。

——年齢を経て有利だと思うことは？

たとえば、ビートルズの音楽が入ってきた初めの頃、みんなが歌っていたのは舟木和夫や西郷輝彦で、ビートルズを聞いていたのはクラスの中でもごく一部の人間でした。ところが、今では、当時の若者はみんながビートルズに夢中になっていたと言われ、後づけで伝説ができてしまう。若い人はそれを資料で知ることができます。そういうものだと思ってしまうのですが、その時代の空気をわれわれは知っている。それが創作をするうえで、年齢を経た者の強みだと思いますね。

——今後の展開としては。

ぜいたくを言えば、書きたいテーマを全部作品にすることができたらよいなと思っています。人間のクリエイティブな才能というのは10年で枯れると思うのですよ。夏目漱石もそうですし、一番良いときは10年。私もそうなればと。傲慢な希望かもしれませんが。

——シニア世代の作家志望者に向けて一言お願いします。

今のシニア世代には時間と経験と体力がありますので、創作に適した条件は揃っていますよね。最近では、講談社でもシニア向けの賞を創設し、多くのメディアで取り上げられています。下地はできていますから、意欲のある方は、そういう流れに乗ったほうがよいと思います。

受賞者インタビュー②

群像新人文学賞

第55回優秀作受賞 藤崎和男

構想10年、やっと書けた

——74歳で群像新人文学賞の優秀作に選ばれましたが、最初から応募する賞は決められていたのでしょうか？

内容的に純文学の新人賞がいいと思っていました。原稿枚数が200枚くらいだったんで、群像新人文学賞の規定枚数に合っていてちょうどよかったです。——自信はありましたか。

初めて書いた小説だったので、自信は半分くらいでした。やっぱり期待がなければ書けないですよ。

——『グッバイ、こおろぎ君』を書かれたきっかけについて教えてください。

60歳の頃、本当にこおろぎがトイレの窓から入ってきちゃったんです。その頃は書いてはいなかったんですけども、構想はありました。10年間ずっと書こう書こうとは思っていましたが、仕事もあつたし、ローンも少しあつたので、ま

まった時間が作れなくて書けなかったんです。70歳になって仕事も辞めて、3年は食べていける貯金があつたので、それでようやく書けました。

——小説のジャンルで言うと、私小説と言っていてでしょうか。

私小説のつもりで書いたわけではないんです。書きたかったのは命について。私の叔父は戦争で死んでいますから、それについては常に考えていました。もちろん、幼い頃の回想シーンですか、実際にあつたことも書いていますが、体験がなければ書けなかったと思います。

2年半、毎日休まず書いた

——書き終えるまで、どのくらいかかりましたか。

約2年半、1日2時間書きました。そのかわり休まず毎日。60歳の頃から帯状疱疹という病気の痛みがあつて、2時間書くのも大変だったんです。今は3時間くらい書けるようになりました。

——本作はどこかユーモラスなところがありますよね。

お笑いが好きで、特に伊集院光さんのラジオ番組が好きなのですが、伊集院さんの話を聞いていると、面白くて帯状疱疹の痛みを忘れるんです。書いているときもあまり話が深刻になつてくると痛みを感じてしまふんだけど、面白いことを書いていると、少し痛みが和らぐんです。だからすべて意図したわけではないけれども、自分を励ますためにも面白く書いていたんだと思います。

——小説の書き方はどのように勉強されたのですか？

僕が一番好きな小説はウィリアム・フォークナーの「八月の光」なんですけど、原書でも読んで、訳と本とをつきあわせて読みました。今まで本は相当読みましたが、しっかり読んだのはこの一冊しかないと思います。そのおかげで小説を書くのに役立ちましたね。

——最後に作家を目指す読者にメッセージをお願いします。

60代だって70代だって、小説を書きたいという志がある人は書いたほうがいいですよ。失敗したり、うまく書けたり書けなかったり、それがとも面白いです。年取った人生に活気を与えてくれるんです。年齢は関係ない、書く気構えがあるかどうかです。僕は命がある限り、書くと思っていますよ。

藤崎和男（ふじさき・かずお）1938年福岡県生まれ。早稲田大学第一文学部卒。出版社勤務後、予備校の非常勤講師などを経験。群像2013年4月号に短編「負けて悔いあり我が闘争」を執筆。



受賞作
『グッバイ、こおろぎ君』